

# パリ通信・第156号

## 最後の自画像「聖ウルスラの殉死」

### 1、パリ・ノートルダム大聖堂の再建

12月7日パリ・ノートルダム大聖堂の再建記念式典が行われた。2019年4月15日夜中燃え続けたノートルダム大聖堂。僅か5年8ヶ月で再び一般公開できるまでに至ったことは驚くべき速さだった。世界中から寄せられた8億4千6百万ユーロ(=1400億円)の修復寄付金があつてのことではあるが、860年前に建立が始まったノートルダム聖堂建築を今なお再現できる技術を有する石工、大工、屋根吹き職人、ステンドグラス職人、彫物師等の技が健在である証だろう。7日の式典にはマクロン大統領夫妻とフランス全土の司教170名を始めヨーロッパ各国首相、トランプ次期大統領、ゼレンスキー大統領など政治色豊かな再建式典が行われた。西門に置か



れ、火災は免れたものの傷んだ大パイプ・オルガン(1733年製造、1868年カヴァイエ・コル再製: 115本の音栓と7952本の代償さまざまなパイプ)も一本一本解体、修理、修復された。テレビ中継を見るだけでも見違えるように美しくなった内部。何世紀もの汚れが落ちて白さが蘇り、建立当時の赤、青、黄色が違和感を感じるほど美しい。生まれ変わった

ノートルダムを見に行こうと気楽に考えていたが、世界中から殺到する人でやっと17日15日見学できた。1時間以上寒い外に並ぶのは大変だった。

マクロン大統領はパリ・ノートルダム大聖堂再建記念式典にローマ法皇フランシスコを招待し



たが断られた。カトリック教徒の拠り所となってきた大聖堂の再建を祝福して然るべきと期待されていたが、法皇はパリではなくコルシカ島アジャクシオを公式訪問し、15日朝地中海文化を共有する地を意識した平和を願う日曜ミサを行った。歴史的にフランス系法皇は数多く、ヨーロッパの政治と宗教に大きな影響を与えてきた法皇の権威、権力、地位が変わったことを象徴するように感じた。

## 2、カラヴァッジョの自画像と聖ウルスラの殉死

今夏からカラヴァッジョを見に行ったシチリア島とナポリ。ローマ法皇や枢機卿の後ろ盾がなければカラヴァッジョの作品はあり得なかった。二十歳でミラノからローマに移ったカラヴァッジョが目にしたのは、貧困に生きる庶民と彼らが心の拠り所としている信仰、その対極にある法皇の富と権力。17世紀初頭、僅か20年の作品に込められた意図、意義、斬新さ、強さには圧倒させられるばかりである。写真技術ができてから肖像画は廃れていく一方だが、自画像を描かなかった画家はいない。ルネサンス期には場面の証人として自画像が描かれることが多い。カラヴァッジョの場合は特に象徴的な例だろう。1606年ローマで絞首刑を宣告されたカラヴァッジョの一縷の望みは法皇パウルス5世(在位期間1605-1621)の「恩赦」である。逃亡者となりマルタ島を目指したのも「マルタの騎士団」に入団し法皇に恩赦を乞うためだった。



マルタ島で「エルサレムの聖ヨハネ会」(1530-1798)に入団し、教会祭壇に「洗礼者聖ヨハネの斬首」(361 x 520 cm)(マルタ島ラ・ヴァレッタ教会)を描いている。しかし思うように事は運ばずマルタ島を脱出し、シチリア、ナポリ、フィレンツェ経由でローマ法皇の恩赦を懇願し続ける。

1610年「ゴリアテの首を持つダヴィデ」(125 x 101 cm)に描かれたゴリアテはカラヴァッジョの自画像だ。ローマ・ボルゲーゼ美術館に所蔵されているが、法皇パウルス5世の甥ボルゲーゼ枢機卿に恩赦の仲介を乞うものである。若きダヴィデに首を落とされたカラヴァッジョ、その剣の刃には「H-AS OS」の文字が読める「Humilitas Occidit Superbiam」(謙虚さが傲慢を殺す)(聖アウレリウス・アウグステイヌスのモットー)。殺人を犯したカラヴァッジョの首は落とされ、謙虚に改悛するというメッセージである。

「ゴリアテの首を持つダヴィデ」



そして当時の手紙や資料で裏付けることができるカラヴァッジョ最後の作品「聖ウルスラの殉死」(1610)(ナポリ、Intesa Sanpaolo銀行所蔵)に最後の自画像がある。この作品(次ページ)は写真からも分かるように保存状態は良くない。ジェノバ総督の息子マルカントニオ・ドリリアが仲介者を通じて発注した。ドリリア家の嫁になる娘ウルスラに贈るために題材も指定



されていた。急いでいたように絵の具が乾く前に仲介者の手に渡り、1610年6月18日ジェノバに到着する。その後ドリア家に保管されていたと思われ、1832年ナポリのドリア邸にあり、1973年売却された。聖ウルスラは4世紀ブルターニュ半島の王の娘に生まれ、一万一千人の娘を伴ってローマ巡礼の旅に出たと言われている。途中異教徒フン族の長アッチラに捕らわれ、アッチラの求婚を退

け、ケルンで弓矢を受けて殉死する。分かり難いがテント内最期の劇的な場面である。アッチラが引いた弓矢はウルスラの胸を貫いている。胸を押さえるウルスラの白い顔は血の気が引いてすでに息絶えている。そのウルスラの背後にカラヴァッジョ最後の自画像が描かれている。ウルスラと共に弓矢に命絶えた穏やかとも見える表情である。1610年7月18日フィレンツェ近くの浜で絶望のままマラリア熱で息絶えた38歳のカラヴァッジョ。その数週間後にローマ法皇パウルス5世の恩赦を告げる手紙が届く。なんと数奇な運命だろう。（古賀順子記）